

# 「友松」の変遷

No. 3

平成22年(2010) 2月



「友松」17号 昭和5年(1930)12月27日発行

A5版 総ページ 186ページ 縦書き 一段または二段組

主な内容 (数字は ページ数)

- 会長挨拶 1
- 論説 30
- 県外消息 30
- 県内消息 30
- 会務・会計報告 役員名簿 編集後記 6
- 卒業生名簿 90

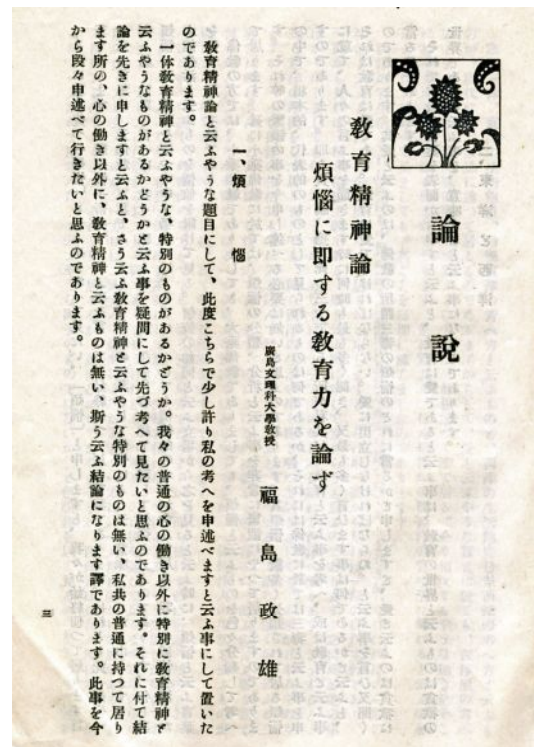
No.3で 名簿については 詳細に紹介します。



思想困難、經濟困難と叫ぶ間は眞の究極にはあらざりき。今は如實恐懼に達看せり。一般社會は協力一致して是等窮境を打開せんが爲に隱忍自重せざるべからざるの地に到着せり。斯地に適し現在に即したる永遠なる成物を建設せざるべからず。徒に他の鞭に倣ふの愚なることを知れり。知るはよし行ふことの益急迫なるを告げつゝあり。吾等は劃期的の建設なくして止むべからず。教育的施設は質實剛健を以て終始せざるべからず。輕舉暴動の起らざるは幸なり。是人々の深刻に覺醒したる確證にはあらざるか。國家の爲に大に實せざるべからず。迎春と共に前途に於て大いに光明の赫奕たるものあるを認む。氣を壯にして大いに待たんかな。否大いに拓かんかな。

## 歳末所感

板谷里次郎



教育精神論と云ふやうな題目にして、此度こちらで少し許り私の考へを申述べますと云ふ事にして置いたのであります。  
一、煩悩  
教育精神論と云ふやうな、特別のものがあるかどうか。我々の普通の心の働き以外に特別に教育精神と云ふやうなものがあるかどうかと云ふ事を疑問にして先づ考へて見たいと思ふのであります。それに付て結論を先に申しますと云ふと、さう云ふ教育精神と云ふやうな特別のものはない、私共の普通に持つて居ります所の心の働き以外に、教育精神と云ふものは無い、斯う云ふ結論になります譯であります。此事を今から段々申述べて行きたいと思ふのであります。

## 教育精神論 煩惱に即する教育力を論ず

福島政雄

論説は、広島文理大の福島政雄教授の教育精神論、「煩惱に即する教育力を論ず」と言う格調の高い講演を記述したもの。「西洋と東洋」「ペスタロッチ」や「教育の力」を述べたあと、「自分の目の前の子供をどうしようかと真剣に考え、真剣に苦しまなければ教育の問題は解決がつかない。煩惱即教育力という味わいは、私共一人一人の生活の実際問題である」と結論付けている。

いつの時代も、教育の主役は子どもたちであり、教育の場での主体的・中心的な担い手は子どもたちと直接向き合っている教師である。

巻頭言は、昭和初期の困難な社会状況の中で「迎春とともに、前途に於いて大いに光明の赫奕たるものあるを認む。氣を壯にして大いに待たんかな。否大いに拓かんかな」という板谷里次郎会長の昭和5年の歳末所感。

それから80年の年月を経た今日、同様に困難な社会状況の中で様々な課題に直面している私たちの胸に響くメッセージである。



## 希 望

### 友松會の發展を思ふて

中郡旭尋常高等小學校

曾 我 靖

鎌倉に教員養成機關として神奈川縣師範學校ある事は誰でも知つてゐる。而して其の卒業生が縣下の初等教育界の中心となりて活動してゐる事も亦同様に知つてゐる。然るに其の人々によつて組織されてゐる。友松會が縣下全般に強く明瞭に認められてゐるかは疑問である吾人は決して宣傳を好む者ではない其の活動せざるを恐るのみである。知られざるを嘆くのではない其の使用を全うせざるを恥づるのである。今回本會より寄稿を求められたのを幸とし聊か愚見を述べて責をふさぐ次第である。幹部の各位先輩並に同僚諸兄の御批判を乞ふ次第です。

教育上の問題を提出し會員に充分自由に協議或は討議せしむる機會を作り其の結果を纏めて或は友松會の決議事項或は宣言として公表しては如何。時事問題又は教育界多年の懸案（師範教育改善案中等學校入學問題）等を捉へ何等かの方法によりて會員の意見研究を徴しては如何若し是等の問題が或は友松會の意見として公表出来たならば教育界に貢獻する所甚大であらう。

三、如何なる団体でも団体の發展はリーダーの適切な指導のもとに團員の自覺ある活動による事論をまたない。友松會の發展亦茲にありと斷言して

一、會員相互の連絡提携を一層密接にしたいものである個々の力は弱いが多數の統制ある力、やがては輿論が偉大の力をもつ事は驚くべきである。友松會が輿論喚起の中心となるには會員相互の連絡提携によらざれば望む事は出来ない。

二、「溜まるれば腐る」友松會も十年一日の如く同事業のみして居ては此の例にもれぬ事と思ふ。生々潑潑たる事項を其の事業中に加へねばならぬと思ふ例へば夏季冬季の講習會も誠に結構な事業であるが、單に講師の講演を聴くに止まらず多數會員の集る機會を利用し、或は講習問題に關係ある

もよいと思ふ。リーダーたる幹部に於かれては會員の向ふべき道、進むべき方向を常に示して我々會員をべんたつして下さい。艦隊に於ける旗艦の如くに我々會員之に續く軍艦の如くに自己の本分を盡して友松會に勝利の喜びが来るでせう。

四、師範學校との連絡を一層密接にしたいものである。師範學校を忘れては友松會が成立せぬ事は明かである、學校を中心として活動すること宗家と其の分家又は家族の如くに有機的に連絡ありたきものである。（終り）

明治43年3月卒業の會員（当時現職）による、友松會發展を念じて示唆に富んだ論考で要旨は次の4点にまとめられる。

- ① 友松會が世論喚起の中心となるには、會員相互の連絡提携がなければ望むことはできない。
- ② 「溜まるれば腐る」。友松會も十年一日の如く同事業のみをしては、この例に漏れない。講演を聴くだけでなく、會員に教育上の問題を提起し、充分自由に協議・討議したことを纏めて決議事項あるいは宣言として公表してはどうか。
- ③ 如何なる団体も、その發展はリーダーの適切な指導のもとに團員の自覺ある活動によることは論をまたない。友松會の幹部は進むべき方向を常に示して會員を鞭撻してほしい。
- ④ 師範學校との有機的な連絡を一層密接にしたいものである。

鋭い眼力と友松會への熱い期待が込められている。80年も前に書かれた文章だが、現在の友松會が抱えている課題でもある。共同体組織としての友松會は、常に會員の声に耳を傾けながら、會のあり方を考え、會員の要望充足のために活動することが求められているのである。



# 縣外消息

## 感想

東京市小石川區林町九四

榎木申之

(明治十二年卒業)

客員及會員諸君、私は皆様方のお膝元へ名刺を配るべきの代はりに今此の處へ立たせて頂きました。是れも時節柄時間の經濟化と一々の煩勞とを避ぐるが爲めなれば、不情者との御腹立ちなく悪しからず御有怨を希ひます。

諸君、私は日本會へ罷り出てんか爲め沼田博士の好意に依る自動車東京驛に下り、驛頭に佇んで乗車口の邊から先づ左に郵船ビル、丸ビル、右は海上ビル及降車口附近一帯を望みましたのに數多くの自動車の駢列せるが眼に映じました。勿論其中には

古きもあり新しきもあり又中古のものもありました。而して其れも新しきものに至りては本年四月一日出来たてのはや／＼の見えるました。然るに其間に淋しさうに、一臺の人力車の介在するを見ないのであります。扱此の光景の謎は、諸君果して何んど解きませうか。其れは丁度今此の中里温泉の樓上に開かれたる皆様方のお集り、即ち横濱支部と本部との合同總會に於ける會員諸君のお揃ひで鼠々たる孤立の人力車は、即ち斯く申す不肖榎木申之であります。鶏群の一鶴と申す言葉が御座います。が今私は之を倒さ



# 縣内消息

## 附屬だより

世界的な校長の御經營にうつりてより花咲き花散ること三度、世の未だ翻譯式教育に混沌たるを斷然脚下に見下して、さながら江川坦庵の詠みける里はまだ夜深し富士の朝日かげにも似たりけるその姿、まさにこれ國産、かくあるべき日本人教育の殿堂、お、！それこそ大臣山下に驚も高く姿も相應しやまと姿に聳えた、なつかしの我が附屬そのものである。

嚴肅なる日々の學びに我も彼も一如となりて夜々としてつとむるは云ふも更なり、世界的新日本の建設を双肩に擔ひ根強き根氣をもつての一舉一動は到處に價値を充實せしめ行く。空地は百花爛亂たる花園と化し教材園を生ず。經費節減も對岸の火災た

り。清く明るき心と強き意志とにみち／＼たる子等は廊下を走ることなく紙屑をおとすこともなく、ひたぶるに若き日本の定礎にいそしみつゝあり。この殿堂の成長尖端を渡りつゝある人々こそ、われ生けるしるしありとぞ思ほゆる程ぞかし。紙面の充費を省き極めて事務的に御報告に及べは、瀧澤厚君、主事、新進の文學士、御就任後日淺く御高遠なる教育説は鈍感子の拜察し得る所に非ざれども、頼朝然たる風采は世界教育界上の明星たる我附屬の實現蓋し近きにあるべし。島田正藏君、首席、肥後は熊本の産、教育學に於ける氏の位置は云はずともがな。スポーツに藝術にまさに教育界の至寶たり。

県内消息は初めに、「付屬だより」「女師付屬だより」「寄宿舎だより」など、師範学校の會員の様子が記述されている。編輯後記には、「県内消息は、本号の新しい試みの一つだが原稿を寄せた支部は半分以下」とある。

「横浜市支部だより」によると、例年、友松会總會と横浜支部總會と合同で開催しているが、この年の泊を伴った總會には350人が出席し、翌日午後まで盛り上がったとのこと。その他の支部だよりも、會員の個人名を挙げて、教職面だけでなく、スポーツ大会等で活躍の記録や私生活にも触れてユーモアたっぷり伝えている。

編輯後記によると「17号で特に意を用いたのが県外通信。県外で鎌倉武士の本領を發揮して活躍している會員からの通信である。」その冒頭は、明治12年卒で東京の小石川在住の會員が、横浜で開かれた友松会總會で演述した要旨。東京の會員の活躍ぶりや後輩への期待を述べている。続く、大阪・佐賀・鹿児島等からの通信は、鎌倉師範時代の思い出や任地の様子、會員の活躍を伝えている。国外では、日本の統治下にあった台湾から。台北市の會員の消息や日本人の生活の様子などが記述されている。当時、友松會員は全国で活躍しており、大阪からの通信には、「若い人はドシドシ来阪を」とある。いずれにしても、この県外通信から、友松会のネットワークの広さや、昭和初期の時代思潮を読み取ることができ興味深い。